

床工 中條真奈美

住宅やオフィスの内装・仕上げ作業の中でも最後に近い段階で施工され、部屋全体の印象を司る、床工事。「男性社会」と言われる建設業界において、この重要工程を担当する女性職長がいる。

父の手伝いからプロフェッショナルの道へ

床工・中條真奈美は、東京出身。高校卒業後、一度は一般企業に就職したものの退職し、床工事の職人だった父の仕事を手伝うアルバイトで手伝うようになった。

「最初はほんとに軽い気持ちで、まさにバイト感覚でした。ただ、時期ははっきりしないんですが、続けているうちに面白さと充実感が出てきて。気づいたら一九年もやっています(笑)」

床仕上げでは、一般的に「フローリング」と呼ばれる板で床を覆う方法もあるが、木を使わず、それ以外のタイル・絨毯・タイルカーペットなどの材料で床を仕上げるのが床工の仕事だ。「最近多いのは、病院なんかでよく使われる『長尺シート』。いわゆるリノリウムで、大きな

壁紙みたいなものをコンクリート打ちっばなしの床一面に貼っていきます」

「材料によって、貼りやすさ、接着のしかたが違って、しかも新製品がどんどん出てくるので、そのたびに種類ごとの施工法を覚えなきゃいけない。細かい部分をカッターで複雑に切り出すこともあって、その点では今でも失敗することはあるし、勉強の毎日ですね」

内装工事だから細かい作業が多く、それほど体力勝負ではないのかと思われがちだが、「体力は必要ですね。床の材料でも重いものがあり、運びながらの作業もやるので…。でも、一番大切なのは自分の分担をしっかりと終わらせる責任感ですね」

殺風景な空間を、「人の住める部屋」に

初めて内装工事の現場で作業したときに、驚いたことがある。もちろん工事中だからコンクリートや配管はむき出しの状態、足元には資材や廃材が転がっているし、隅の方は埃だらけ。新築物件の裏の部分を見た気がした。

KEEP

守り、伝えること

「仕上げ工事で部屋が一変する瞬間に立ち会えるのが、この職種の醍醐味」



左/壁のクロス貼りも終わり、まさに床工事を仕上げている最中の室内。床ができた後は土足厳禁となるため、工程は最後の方になる。中/現在従事している東京志賀寮の作業所。「この作業所は埃ひとつ舞わないくらい、すごくきれいなのでびっくりしました」右/竹中工務店・西居所長(右)と、監理技術者の加藤監督(左)。所長は「かつて“3K”の代表格と言われていた建設業界に、これからは彼女のような存在が入ってくれば」と期待する。



現場のプロフェッショナル
KEEP & CHANGE

「想像以上でした。こう言っただけですが、『こんなところに人が住めちゃうの?』っていうくらい。それが壁紙や床を仕上げると、キレイな部屋に変わるんです。終わった時に『すごく明るくなったね』と言ってもらえると、職人の仕事

ってすごいなと思うし、こういう瞬間を味わえるのは、仕上げ職ならではの醍醐味ですよ」

女性の社会進出が進んだとはいえ、まだまだ

「男の世界」の印象が強い建設業界。女性の絶対数も少なく、働く環境として整備されているとは言いがたい部分もある。冷暖房完備の事務所や休憩所もあり、ゼネコン側の配慮も行き届いてきたが、

「やっぱり男性と同じトイレを使うのは抵抗があります。そういう時は先に現場に入ってる女性と情報交換して、『この公衆トイレが使えますよ』とか、同じところでも時間をずらして行ったりして気を遣ってますね」

「女性の数は少ないですけど、昔に比べれば増えてますよ。それに『女性だから、細かい作業が得意なんです』とか『仕上がりがきれいですね』って言われることもあって、そういう時はすごくやりがいを感じます。あんまりハードルを上げてほしくないんですけど(笑)」

女性とはいえ、職長ともなれば他職との調整や職場の環境づくりなど、段取り事にも奔走しなければならぬのは他の職人と同様だ。

「この現場では、入った時から職長です。もちろん自分でも作業するんですけど、主な施工は仕上げが得意な先輩に任せて、みんながなるべくやりやすく、動きやすいように…。片付けや準備とかを常に心がけてます」

こちらの女性の監理技術者である(株)竹中工務店の加藤監督は「男性ばかりの他の職長ともし

っかりコミュニケーションを取って、要求すべき点も押さえてる。私たちがだけで見きれない部分を職長同士の連携でフォローしてくれるので助かってます」

と、その活躍ぶりに目を細める。

女性が入ってきやすい業界に

女性が入りやすい業界になるために、この仕事の内容をもっと女性に知ってもらいたいと言う。「一般の方は仕上がった状態しか見てないから、床工の仕事内容はきっと想像もつかない。でも、女性でこの仕事に向いている人はきっと多いですよ。今はクレーンやトラックも女性が運転する時代。もちろん、力作業に関しては男性にはかなわないんですけど、違う面で活躍できることはたくさんあると思うんです」



左/床材の施工に使う道具の数々。「接着剤が手にくっついてなかなか取れないのが、女性としては辛いところ。ハンドクリームは手放せません」
右/材料によっては、貼る際に伸び縮みするなどの特性を理解した上で仕上げていく。「ずっと残るし、部屋の印象を決める部分なので、少しでもきれいに仕上げたい」



なかじょう・まなみ◎1973(昭和48)年、東京都生まれ。高校卒業後、会社勤務を経て床工事職人だった父の仕事を手伝うようになり、自らも職人となる。住宅・オフィス・病院などさまざまな建物の床内装仕上げを担当、現在の現場では(株)瀧田の職長として10人の職人を束ねる。有機溶剤作業主任者取得。

CHANGE

応じ、変えること

「女性ならではの感性や細かい部分への配慮が活かせる仕事。向いている人はきっと多い」